

札幌大学総合論叢 第50号 (2020年10月)

〈翻訳〉

M.M. ギン 『ドストエフスキーとネクラースフ——
二つの世界観』 翻訳の試み (1)Опыт перевода книги М. М Гина «Достоевский и Некрасов:
Два мировосприятия» на японский язык (1)

鈴木 淳 一

前期象徴派（デカダン派）を代表する詩人の一人、バリモント（К.Д.Бальмонт, 1867-1942）はこう言っている——19世紀のロシア・ポエジーは7人の偉大な詩人を知っている、すなわちプーシキン（А.С.Пушкин, 1799-1837）、レールモントフ（М.Ю.Лермонтов, 1814-41）、コリツォーフ（А.В.Кольцов, 1809-42）、バラトインスキー（Е.А.Баратынский, 1800-44）、ネクラースフ（Н.А.Некрасов, 1821-78）、フェート（А.А.Фет, 1820-92）、チュツチェフ（Ф.И.Тютчев, 1803-73）の7人である、と（注1）。周知のように、最初の4人はロシア文学史で「詩の黄金時代」と呼ばれる1820年代から1830年代にかけて名を馳せた詩人であり、それに対して残る3人は19世紀中葉から後半にかけて活躍した詩人である。

19世紀のロシア文学史にざっと目を通すと、詩と散文が交互に時代を支配しているという現象が目につく。18世紀のロシア文学を主導した古典主義、センチメンタリズム、19世紀初頭のロマン主義、中葉のリアリズム、世紀末以降のモダニズムという主流をなす文学思潮の変遷や社会的動向との相関関係については横目で睨めつつもさておいて、この現象を思い切って簡潔に提示すると次のようになる。

- | | |
|------------|---|
| 1801～1820年 | ＜近代ロシア文学成立前夜＞ 標準ロシア語の確立とその文学的実践の試行最終期間、1820年代と不可分な詩の時代、クルイローフ（И.А.Крылов, 1769-1844）、ジュコフスキー（В.А.Жуковский, 1783-1852）、グリボエドフ（А.С.Грибоедов, 1795-1829）が活躍。 |
| 1821～1840年 | ＜詩の（黄金）時代＞ プーシキンとプーシキン・プレイヤツド、レールモントフ、コリツォーフ、バラトインスキー等が活躍、ただし1830年代には歴史小説を筆頭に多様な散文作品も発表され、時代の主流が詩から散文へ移行する予兆ともなっている。 |

- 1841～1850年 <散文の時代> 「オーチェルク очерк」と呼ばれる、いわばルポ文学（＝報告文学，記録文学）の隆盛期であり，「自然派 натуральная школа」とゴーゴリ（Н.В.Гоголь, 1809-52）が活躍。
- 1851～1860年 <詩の時代> 新旧様々な詩人の作品の雑誌への大量掲載と詩集の大量出版，派閥を超えた一級批評家による詩論の相次ぐ発表，チュツチェフの復活，ネクラースフ，フェート等が活躍。
- 1861～1880年 <散文の時代> 19世紀末から20世紀初頭にかけて世界を震撼させことになる「ロシア・リアリズム」の時代，主流は長篇小説，ゴンチャローフ（И.А.Гончаров, 1812-91），トゥルゲーネフ（И.С.Тургенев, 1818-83），ドストエフスキー（Ф.М.Достоевский, 1821-81），サルティコフ＝シチェドリ（М.Е.Салтыков-Щедрин, 1826-89），レフ・トルストイ（Л.Н.Толстой, 1828-1910）等が活躍。
- 1881～1900年 <社会的・文化的沈滞期> 詩と散文を問わず活力喪失の時代，散文ではコロレンコ（В.Г.Короленко, 1853-1921），ガルシン（В.М. Гаршин, 1855-88），それにチェーホフ（А.П.Чехов, 1860-1904）の主に短編が，詩では1890年代のメレシコフスキー（Д.С.Мережковский, 1866-1941），バリモント，ブリュースフ（В.Я.Брюсов, 1873-1924）など前期象徴派（デカダン派）の活動が人目を引く程度。
- 1901～1917年 <詩の（銀の）時代> 1820年代～1830年代の「詩の黄金時代」と並び称される第二の詩の全盛時代，「ロシア・ルネサンス」とも呼ばれ，「後期象徴派」，「アクメイズム」，「未来派」等，多様な詩派が陸続と生まれ，独自のにして多彩な詩人が活躍。

詩と散文の交替はどうして生じるのか，両者はどのような関係性にあるのか——訳者はそんな素朴な疑問を，ほんやりとだが，ずっと抱いてきたように思う。とくに研究対象として意識することなどなかった。詩と散文との力関係の強弱変化は常識と思い込んでいたとすれば，それも何ら不思議ではない。

そんな中，コージノフの『19世紀ロシア抒情詩論（スタイルとジャンルの発展）』を手にする機会があり，第5章「19世紀中葉の抒情詩——フェートとネクラースフ」に大きな刺激を受けた。コージノフはそこで，19世紀後半のロシアの抒情詩と長編はお互いがお互いの生みの親育ての親であって，「ドストエフスキーとネクラースフ」，「トルストイとフェート」は肥沃にして深遠，喫緊にして重要であるにも拘らず，これまで放置されてきてしまったテーマである，と述べていたからである（注2）。

しかし、諸般の事情によってコージノフの触発に答えられないまま、さらに10年前後が経過してしまった。そして、時間的余裕に恵まれた今こそ好機と思ったら、もはや定年が目前にまで迫っていた。今更ながらに研究とは、何やら馳の最後っ屁みたいで、気が引けないわけでもないが、「遅くともしないよりはまし」という諺にも励まされ、「ドストエフスキーとネクラースフ」というテーマにゼロ地点から挑戦してみようと考えた。ささやかではあっても、コージノフへの報恩ということも期待していないではない。

二人の関係を扱ったもので訳者の手元にある一番新しい論文は、クラードワの『ドストエフスキーとネクラースフ——創造的対話。モノグラフ』である（注3）。しかしこのモノグラフは、研究目的が絞られている分、捲土重来を期す訳者にとっての基礎資料としては情報の質、量とも濃淡の差があり過ぎるように思われる。ゼロ地点からの出発に相応しい基礎中の基礎的な資料としては、1985年と発表時期はやや古いですが、二人の関係を年代順に手際よく纏めているM.ギンの『ドストエフスキーとネクラースフ——二つの世界観』の方がより適切との判断に立ち、ギンの著書をここに翻訳紹介することとした次第である。

なお翻訳紹介する著書の構成は、以下の通りである——

＊序

＊第1章 偉大な第一発見者による最初の発見

＊第2章 「奇妙な」関係

＊第3章 引用と論争、論争と引用…

＊第4章 大罪人論争

＊第5章 一つの階に二つの出口

＊第6章 どっちが上か？

今回は第1章のほぼ半分を訳出したが、今後も引き続き紙幅の許される限りにおいて、間断なく順次に翻訳紹介してゆく心積もりである。なお、原注は本文の脚注として訳し、訳注については括弧（〔 〕）に入れて本文中に差し込んである。

（注1） バリモントの引用は、「4巻本ロシア文学史」第3巻からの孫引きである——
История русской литературы в четырех томах, т. 3. Л., 1982, с. 312.

（注2） *Кожин В.В.* Книга о русской лирической поэзии 19 века (Развитие стиля и жанра), М., 1978. (6章途中までについては拙訳がある——札幌大学外国語学部紀要「文化と言語」75, 77, 79, 80, 81, 82, 84号——なお第5章は82号に所収)。

（注3） *Н.А.Кладова.* Ф.М.Достоевский и Н.А.Некрасов: творческий диалог: Монография, М., изд. «Спутник», 2009.

<序>

1877年12月30日〔新暦では1878年1月11日、以下いちいち新暦を示さないが、19世紀の場合は12日加算すると新暦となる〕、ペテルブルクでネクラースフが埋葬された。作家のものとしては前代未聞の葬儀であった。何千人もの群衆が、愛する詩人の野辺送りに参列したからである。凍てつくような寒い日で、葬儀の行なわれたノヴォデヴィチ修道院の教会堂は、息苦しくて暑かった。立錫の余地もなかった。フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキーは、妻のアンナ・グリゴリエヴナとオレスト・フョードロヴィチ・ミルレル教授の2人を伴って、新鮮な空気を求めて外へ出た。それから3人は墓地へと足を踏み入れ、詩人の剥き出しの墓標の傍らまで歩いて行った。

「私が死んだら、アーニャ、私をここか、あるいはお前の好きなところへ埋めておくれ。でも、リテラトゥールヌイエ・モストキーのヴォルコフ墓地には埋めないでおくれ。敵たちに囲まれて眠りたくないんだ。連中には生きている間にさんざんひどい目にあったからね！」¹。

ドストエフスキーの願いは妻にとっての法である。彼の死後すぐさまアンナは近い人々に、故人のためにノヴォデヴィチ墓地に埋葬場所を選定してくれるよう委託したが、アレクサンドル・ネフスキー大修道院から嬉しい申し出（場所の選定は自由、しかも無料）があり、アンナはその申し出の一事だけで埋葬場所を変更したのであった²。しかし、ここで私の興味を引くのは、作家自身の動機である。ヴォルコフ墓地には敵がいるという。ネクラースフは敵ではないのか？ ネクラースフは悪意に満ちたエピグラムや嘲笑をドストエフスキーに投げつけなかっただろうか？ ドストエフスキーはネクラースフの雑誌と激しく、憎悪剥き出しで論争しなかったというのか？ 彼らは敵対する陣営に属していたのではないか？ ネクラースフの友人や盟友がドストエフスキーを取り巻く人々と仲良く並び立つ姿など、とても想像できはしない。こうしたことのすべてが彼らの関係に影響を及ぼさなかったなどということがあり得るであろうか？

とはいえやはり、ネクラースフは敵ではない。アンナはこう証言している——「フョードル・ミハイロヴィチはネクラースフを青春時代の友人とみなし、彼の詩的才能を高く評

1 *Достоевская А.Г. Воспоминания. М., Художественная литература, 1971, с.317.* [邦訳、『回想のドストエフスキー』下、松下裕訳、筑摩書房、169頁]

2 *Там же, с.383.* [邦訳、同前、259頁]

価していました」³。「青春時代の友人」という決まり文句が正確無比だというわけではない。彼らが知り合ったのは24歳を迎えようとする1845年のことで、青春はとうに過去のものだったからである。それでもアンナはこの決まり文句を何度も使っているし、さらに驚くべきなのは、ほとんど同じ決まり文句が詩人側にも見出せるということである。詩人の妹A.A. プットケーヴィチは1877年3月23日、詩人が病気で死の床に就いた頃につけていた日記に、こう書きつけている——「ドストエフスキーがやってきた。兄と彼を結び付けていたのは青春時代の思い出であった（彼らは同い年である）。兄は彼が好きだった」⁴。

上掲の決まり文句は、ネクラースフの言葉から採取することもできれば、またドストエフスキーの言葉から採取することもできる。つまり二人ともに、お互い申し合せたかのように、その短期の友情を青春時代に結び付けているのである。これは偶然のことではない。彼らの文学的青春が、最初の大きな文学的成功という忘れ難い時期と重なり合っているためなのである。

彼らの相互関係は、個人的なものにしろ、社会的なものにしろ、文学的なものにしろ、複雑極まりない。「敵」という一語で済ますことも、「友」という一語で済ますこともできない。ドストエフスキーとネクラースフの二人をともによく知る同時代人の一人、作家のネミロヴィチ＝ダンチェンコ〔1858-1943、演出家、1898年にスタニスラフスキーとともにモスクワ芸術座を創設〕は、ドストエフスキーはネクラースフに「愛憎相半ばする複雑な感情」⁵を抱いていたと断言している。こうした撞着的な語結合、あるいはそれに似た、たとえば「友情と反目」といった語結合は、おそらく、彼らの相互関係の定義により適ったものであり、いずれにしても撞着的な語結合の方が撞着する2語のどちらか一方による定義よりもずっと正確であることは間違いない。

ネクラースフとドストエフスキーほど、世界観、理想、共感、反感、思想的志向性、創作原理において異なった二人の芸術家を想像するのは困難である。と同時に彼らはまた、ある意味では非常に近い関係にあって、不断に接触し合い、意見を交わし合い、衝突し合ったりしていた。いずれの場合でも通常は必ず論争が勃発したが、それでも彼らの文学の道はひっきりなしに交錯し合うか、あるいはほとんど合流しそうになるくらいに並行していたのである。彼ら二人の道はその後、まったく別方向を目指したかと思えばまた接近

3 *Достоевская А.Г. Воспоминания.* たとえば、エリセーエフのような、著名にして事情に通じていたネクラースフの雑誌仲間の証言も参照のこと。エリセーエフは、ドストエフスキーは「いつもネクラースフに好意的でした」と言っている（*Письма Г.З.Елисеева к М.Е.Салтыкову-Щедрину. М., 1935, с.163-164.*）。

4 *Литературное наследство. Т.49-50. М., Изд-во АН СССР, 1949, с.172.*

5 *Там же, с.596.*

し、再び別な方向を目指して離れてしまうという経路を辿ることになる。それゆえ二人の作家を比較考量してみることは、とりわけ学ぶことの多い作業なのである。

二人の相異なる、と同時にある点では相似的な芸術家の比較研究、歴史的で類型学的な研究というのは、重要な課題である。それは、文学史のプロセスの一般的な法則性、それに比較対象となっている人間それぞれの個人的な特性を、より深くより十全に理解するのを手助けしてくれるからである。アカデミー会員のジルムンスキー [1891-1971, ソ連の言語学者、文学史家、ゲルマニスト] はこう言っている——「比較は比較される現象の（個人的、民族的、歴史的）特殊性を捨象しない。その逆に、ただ比較の助けを借りてのみ、つまり類似と相違の解明を通じてのみ、その特殊性がどこに存するのかを正確に確定し得るのである」⁶。

純文学を成立させるのは、優れた多種多様な作家たちであり、純文学の豊かさと偉大さを創り上げるのは、創造的な個人個人それぞれによって共通財産の中へ持ち込まれたものであり、貢献度の価値を定めるのは、何はさておき、共通財産へ持ち込まれたものの独自性であり、その新機軸である。

ここで言及しているのは、そうした作家たちのことに他ならない。ドストエフスキーとネクラソフ以上に遠く離れた対極的な存在を考えるのは、それこそ至難の業のように思える。一人は詩人、もう一人は散文作家である。前者は生涯ずっとロシア社会の急進的左翼陣営と繋がりを持ち、ロシアの革命的民主主義という理念に対して全身全霊で奉仕し、後者は終生、革命の理念の反対者、革命的な現実変革の理念の反対者であった。いったい何が彼ら二人を結び合わせることができたのか？

普遍的な民主主義とヒューマニズムを理想とするという共通性、それに「ロシア人大多数」の利益や「虐げられた人々」、「民衆の分け前」、「民衆の幸福」に対する献身的な奉仕——作家と詩人双方の世界観、創作活動、社会活動の基盤と土壌を構成するこうした要素こそ、他の何にも先んじるとともに他の何にもまして、彼らが刻み付ける文章の1行1行に貫流しているものである。二人の作家が解決方法の理解において、つまり現実変革方法の理解においてどれほど懸け離れていようとも、もし彼らが、ネクラソフとドストエフスキーのように、真剣かつ熱心に自国民衆のために身を捧げ、自国民衆の利害を生きがいとし、自国民衆の痛みを分かち合っているのであれば、二人の間には必ずや共通性が、何らかの偶然的な一致の中ではなく、もっとも重要なものの中に、すなわち世界観や創作活動の中に反映される筈であり、その共通性はさらにまたおそらく（私たちの関心の対象

6 Жирмунский В.М. Проблема сравнительно-исторического изучения литератур. // Известия АН СССР. Отделение яз. И лит., 1960, т.19, вып.3, с.177.

である二人の作家の場合はとりわけ）、創作方法といった極めて個人的な領域においてさえも姿を現さずにはいられない筈なのである。そして、もちろん、そうしたことのすべてが二人の作家の個人的な相互関係に一定の確固たる痕跡を残したに違いないのである。

ネクラースフとドストエフスキーの関係の複雑さは、その研究の一定の方法論をもそれとなく仄めかしてくれている。そこではただたんに一般的な概要だけに、二人の関係や交流の外面的な図式や輪郭の叙述だけに制限してしまうことなど到底できない。あらゆる事実、現存するあらゆる資料に、どんな些細なこともすべて考慮した上で、綿密な分析を施さなければならない。ディテールや取るに足らない些事こそがまさしく、ときとして、複雑に絡まり合った人間関係の本質はもちろん、それよりさらに複雑な思想関係や創作関係の本質を洞察できるようにしてくれるからに他ならない。

ドストエフスキーの『未成年』にこんなエピソードがある。若いアルカーヂー・ドルゴルーキーが父親のアンドレイ・ベトロヴィチ・ヴェルシーロフに、自分とカテリーナ・ニコラーエヴナ・アフマーコワとの相互関係について語る場面である。その情報に異常なほど興味を引かれたヴェルシーロフは、一語一語を貪るように聞き取り、「しばしば話を中断しては神経質にこう繰り返した——『些事を忘れないように、大事なのは些事を忘れないということだ。特徴というのはときとして、細密になればなるほど、より重要なものになるからね』」（ドス 13 巻 223 頁〔第 2 編 5 章〕）⁷。偉大な心理家でもある長編作家は、些事というものに価値を見出し、生活においても些事に特別な注意を払いながら、世間の人々と、そしてとりわけネクラースフと交際していたのであった。やがて私たちは、作家の兄への要望を知ることになったとき、ネクラースフとの関係においてはあらゆるディテールに、ごく些細なディテールにさえも目を光らせなければならないことになるであろう。

たんにそうするだけでも、おそらくは、二人の複雑な相互関係の本質へと迫ることができに違いない。そのときに不可欠なのは、入手し得るあらゆる資料についての可能な限り十全な分析である。分析が十全かつ入念で、微に入り細を穿ったものであればあるほど、成功のチャンスも膨らむことになるだろう。なぜならディテールや細部こそがときに、当該の芸術家、当該の創作者に不可分の固有性をなしている特異性へと到達できる可能性を

7 ドストエフスキー作品からの引用は、Достоевский Ф.М. Полн. собр. соч. в 30-ти томах. Т.1-27. Л., Наука, 1972-1984, による（引用箇所は「ドス何巻何頁」と略記）。ドストエフスキーの手紙からの引用は、Достоевский Ф.М. Письма. Под ред. Долинина А.С. Т.1-4. Л.-М., 1928-1959, による（引用箇所は「ドリ何巻何頁」と略記）。ネクラースフの作品からの引用は、Некрасов Н.А. Полн. собр. соч. и писем в 15-ти томах. М., Наука, 1981-, による（引用箇所は「ネク何巻何頁」と略記）。その他のネクラースフ関係の引用は、Некрасов Н.А. Полн. собр. соч. и писем в 12-ти томах. М., Гослитиздат, 1948-1953, による（引用箇所は「ネク何巻何頁」と略記、ただし巻数はローマ数字使用）。

与えてくれるからである。そうなると、ずっと前から知られ、周知の事実と化している事柄ですら、より正確にして説得力のある形を取って姿を見せる、ということもあり得ないことではない。1840年代のネクラソフとドストエフスキーの相互関係は、研究し尽くされ、いまではもはや明々白々と思われるような事項に属しているが、二人の関係は完全な決裂で終了したという確信が未だに幅を利かせているのである。だが実際上は、これから明らかにされてゆくように、二人の間には本質的に一度として、完全な決裂もなければ完全な親交も存在しなかったのである。

「ドストエフスキーとネクラソフ(二つの世界観)」というテーマを広範かつ周到にして、全面的に検討したと思われる論文は、これまでのところ見当たらない。「ドストエフスキーとネクラソフ」をテーマとして第二次世界大戦の以前と以後に我が国で公表された著書や論文の作者たちは、二人の思想的な関係や文学的な関係、それに個人的な関係の何らかの側面に一再ならず言及してはいるものの、それらは個別的な発言や事実について指摘する以上のものではなかった。「ドストエフスキーとネクラソフ」という課題の包括的な研究に最初に手を染めたのは、著名なソ連の文学研究者の A.C. ドリーニンである。公刊されたドストエフスキーの書簡に付した注や、その後の『未成年』の創作史に焦点を絞った論文の中に見られる彼の観察や想像は⁸、全体として見れば、彼ら二人の思想的関係、文学的關係、個人的関係についての初めての概説であり、その価値の多くは今日に至るまで色褪せていないが、それでもそうした諸々の観察は一つの図柄に纏め上げられないままに放置されているのである。

「ドストエフスキーとネクラソフ」という興味深いテーマに絞った論文が発表されたのは、やっと 1971 年のことに過ぎない。それは当時祝われたドストエフスキーとネクラソフの生誕 150 周年事業の一環として公刊されたもので、本論考(単行本)の雑誌用ヴァリエーション⁹とほぼ同時に、Ф.И. エヴニン、В.А. トゥニマーノフ、Е.В. スタリコワの手になる 3 論文が陽の目を見たのであった¹⁰。1972 年以降にもこのテーマを巡る論文が何本

8 ① Долинин А.С. Последние романы Достоевского. М.-Л., Советский писатель, 1963, с.64-74, 128-133.

② Долинин А.С. В творческой лаборатории Достоевского. Л., Советский писатель, 1947.

9 Гин М. Некрасов и Достоевский (Два мировосприятия)// Север, 1971, №11, с.103-123; №12, с.106-124.

10 ① Евнин Ф.И. Достоевский и Некрасов. // Русская литература, 1971, №3, с.24-48. ② Туниманов В.А. Достоевский и Некрасов. В кн.: Достоевский и его время. Л., Наука, 1971, с.33-66. ③ Старикова Е.В. Достоевский о Некрасове. В кн. Н.А. Некрасов и русская литература. М., Наука, 1971, с.294-318.

か発表されている¹¹。それらの論文は、題名こそまったく同じか、あるいは似通ってはいても、その内容と性格、価値は、まるで異なっている。

列举した論文中、とくに注目すべきは最初の2本である。エヴニンは、作家と詩人の相互関係の全体的な概略を提示すること、「何よりもとりわけドストエフスキーとネクラースフの友情と反目の対外的な関係史を追究すること」（『ロシア文学』、1971年、第3号、26頁）を課題としている。ドストエフスキーとネクラースフ双方の作品に通暁しているエヴニンの論文は、外郭の輪郭線を記述するだけにとどまらず、新しく説得力に満ちた観察と洞察を少なからず含んでもいる。またトゥニマーノフは、詩作品『ヴラス』と長篇『未成年』の呼応関係を皮切りに、その他諸々の観察を出発点として、ドストエフスキーの世界観の重要な独自性を深く鋭く析出している。他の研究者たちは、二人の相互関係という問題の個別的な側面や要素に焦点を絞っていて、その結果すべての論文、あるいはほとんどすべての論文それぞれに、新たな観察、新たな情報が盛り込まれている。これから論を進める中で、そうした新たな観察と情報にも注意を払うように努めるとしよう。

本論考の作者が目的として掲げたのは、手元にある資料のすべてを考慮に入れつつ、ドストエフスキーとネクラースフの個人的な関係、実務的な関係、思想的および文学的な関係の全貌を、可能な限り周到かつ完全な形で提示するということであるが、この目的を達成する道の途上には、主観的な性格のものにしろまったく客観的な性格のものにしろ、数多くの障壁が横たわっていることは百も承知のつもりである。天才の芸術世界を見通すのは、天才の世界観と心理の深奥中の深奥を洞察するのは、並大抵のことではない。主観的な複雑さというのは、客観的な複雑さによって倍加されてしまう。原典資料の理想的なほど都合な十全性など、実際には望むべくもない。それゆえ、現在時点で自由に活用可能な不十分極まりない資料をどれほど入念に検討しようとも、いくつかのミッシング・リン

11 ① Захарова Г.В. Образы Некрасова в «Дневнике писателя» Достоевского. В кн. Н.А.Некрасов и русская литература: Второй межвузовский сборник. Ярославль, 1975, вып.40, с.50-70. ② Лебедев Ю.В. Некрасов и Достоевский в 60-е годы (Эпизод из творческих взаимосвязей). В кн. Н.А.Некрасов и его время: Межвузовский сборник статей. Калининград, 1975, вып.1, с.95-98. ③ Корман Б.О. Лирический герой Некрасова в «Записках из подполья» Достоевского. Там же, с.99-105. ④ Зельдович М.Г. «Взаимоотражение» художественных произведений: Некрасов и Достоевский (К постановке историко-функционального изучения литературы). Там же, 1981, вып.6, с.102-115. ⑤ Смирнов В.Б. Достоевский в оценке «Отечественных записок». В кн. Русская литература 1870-1890 годов. Свердловск, 1970, сб.3, с.3-18. ⑥ Кошелев В.А. Некрасовская натуральная школа и молодой Достоевский. В кн. Н.А.Некрасов и русская литература: Тезисы докладов. Кострома, 1971, с.55-56. ⑦ Дедюхин Б. Апрельский визит. // Волга, 1981, №12, с.170-187. しかし、⑦は非常に皮相的な論文で、いくつかの勘違いがあるだけに過ぎず、実質的にこのテーマの研究に資するところなど何一つない。

クが生じてしまうことは回避しようもなく、したがって、そうした間隙はどうしても推論や仮説によって埋めざるを得ないことになるだろう。

その場合、とくに重要なのは、創作上の接触関係、思想的および芸術的な相互関係、それに相互評価の研究である。こうした諸々の研究は、2人の芸術家の相互関係や芸術家それぞれの独自性を理解する手助けをしてくれるばかりか、さらにはロシア文学史の推移を理解するための一定の確固たる資料を提供してくれることもまた疑いようがない。とはいえ、この研究領域はもっと複雑に入り組んでおり、この領域の研究の途上に待ち伏せている主観主義の罠も、もっと多くてもっと大きなものに違いないと思われる。

ドストエフスキーとネクラソフの思想的および文学的な接触については、これまですでにソ連の文学研究者たちの手で少なからず解明されてきたが、それでもこの領域における情報の絶対的十全性への到達にはほど遠い状態である。創作上の相互関係は必ずしも常に表層部に露出しているとは限らず、ある特定の視角からしか眺め得ないということもしばしばあるからである。彼らの相互関係のあらゆる要素が既に解明済みであるなどと、いったい誰に請け負うことなどできようか？

しかし本論考にも、本論考の可能性にも、限界があるということを——手元にある資料をどれほど念入りに検討してみたところで本論考の思い描く未来図は不完全なものに終わらざるを得ないということを——弁えつつもなお、資料がより十全に提供されればされるほど、掲げられたテーマの全貌はより正確に、より説得力のあるものとなるだろう、という地点から出発することにしよう。そしてただひたすらに十全性を目指すことにしよう。

＜第1章＞ 偉大な第一発見者による最初の発見

私たちにとってのネクラソフ——それは何よりもまず大詩人ということである。しかし彼の活動は多岐的、かつ多面的であった。彼は、とくにその文学的な活動の最初の頃には、とにかく何にでも手を染めた。ボードビル、ドラマ、喜劇、短篇、中篇、長篇、論文、書評、フェリエトン〔時事的世相戯評、仏語の *feuilleton* に由来〕を書き散らし、翻訳にまで従事している… しかし彼は、たとえ1編の詩作品も1行の散文も書かなかったとしても、もっとも偉大なジャーナリストとして、19世紀ロシアの最良の雑誌の創始者、編集者、出版者として、ロシアが彼の以前にも以後にも知らない編集者兼出版者として、文学史と社会思想史の1頁に名誉ある地位を占めることになったであろう。

もしも自然が、編集者兼出版者として活動するために特別に予定された人間、第1級の

編集者としての最良の資質の諸々を有機的に併せ持った人間を創造すべしとの課題を与えられたなら、この課題をこなすのにクラースフを創造する以上の方法など見つけれなかったであろう。しかも、ジャーナリズムの舞台における成功に与って力があったものの一つにとして、彼はまた、才能ある人間を嗅ぎ分ける非凡で稀有な感覚、一目で相手の才能を察知し評価する能力も兼備していたのであった。

たとえば彼は、1830～40年代の批評には見向きもされなかったチュツチェフを——ベリンスキーのようなロシア・ポエジーに通暁した批評家にさえ注目されなかったチュツチェフを——掘り起こしてみせている。また彼は、まだ誰にも知られない一将校だったレフ・トルストイが盲滅法書き殴った手稿を読むや、すぐさまその作者に潜む大きな才能を察知し、破格の条件で「同時代人」誌へ勧誘しているが、そのおかげでトルストイはトルストイとなったのである。さらに彼は最初に知り合った瞬間、まったく無名のサラトフ・ギムナジウムの教師にして駆け出しのジャーナリストに過ぎなかったニコライ・チェルヌィシェフスキーの中に傑物の萌芽を直観していて、やがてその直感に導かれるかのようにチェルヌィシェフスキーはチェルヌィシェフスキーとなったのであった。それは才能ある人物を探知できる一種超人的な感性と言えよう。そしてこの比類なき第一発見者による最初の大発見——それこそはドストエフスキーの発掘ということに他ならないのである。

1845年5月末、ドストエフスキーはグリゴローヴィチ〔1822-99、小説家〕の推薦に従って、作品集『ベテルブルク文集』に掲載してもらうために、処女作『貧しき人々』の手稿をネクラースフへ手渡した。彼らは当時3人ともに若く、文学活動を始めたばかりであった。確かにネクラースフは既に、主としてボードビル作者、フェリエトン作者、批評家として多少とも名前を知られていたし、また編集者兼出版者としての活動も開始していて、そこらも十分に順風満帆であった。彼が大成功を取めたのは、当時出版したばかりの作品集『ベテルブルクの生理学』によってである。ネクラースフという名前は、おそらく、ドストエフスキーの耳になにがしかのことを吹き込んでいたに違いない¹²。

ネクラースフはグリゴローヴィチと一緒に腰を下ろし、新作を読み出した。品定めのもりで、「10頁も読んだら分かるだろう」といった気持だった。しかし、読み切ってしまうまで頁から目を離すことができなかった。長篇は衝撃的な印象をもたらし、涙と吸り泣

12 グリゴローヴィチの証言によれば、彼は5年前に既に（グリゴローヴィチが主張している1839年ではなく、1840年に）、ドストエフスキーと一緒にネクラースフの未熟な処女詩集『夢と響』を読んでいるのだが、この事実がすぐに忘却されるのも仕方ないことであった。ましてや詩集の作品自体が気に入らなかったのだから、忘却はなおさら当然の成り行きであったろう（Григорович Д.В. Литературные воспоминания. М., Гослитиздат, 1961, с.49-50, 87-92）。とはいえ、ネクラースフの詩集以後の活動について、文学に興味津々の駆け出し作家が何も知らないでいることもできなかった筈である。

きなしには読み進められなかった。両者はともに、新たな大きな才能がロシア文壇へ登場したことを確信した。読み終えたとき、夜の12時はとうに越えていたが、両者は時を移さず著者のもとを訪れ、成功を祝福しようと決心したのであった。

午前4時にネクラソフとグリゴローヴィチが押しかけ、いきなり抱きついて祝福したとき、ドストエフスキーの心身の状態がどんなだったかは、容易に察することができよう。ネクラソフはそのときその場で、この手稿は今日中にペリンスキーのところへ持って行くつもりだと言い放った——「お会いになればお分かりになるでしょうが、何とも凄い人なんです！ お知り合いになればお分かりになりますよ。本当に素晴らしい人なんです！」。こうして手稿はその日のうちにペリンスキーへ届けられたのであった。

「新たなゴゴリの出現です！」——ネクラソフはそう叫びながら、『貧しき人々』を携えてペリンスキーの住居へ入っていった。「君のところではゴゴリが雨後の筍みたいによきによき出てくるんだね」——ペリンスキーは厳しい口調でそう言いながらも、手稿を受け取ったのであった。

ペリンスキーのところでもまた、まったく同じ光景が繰り返された。手稿に目を通してしまうと、若い友人の歓喜に対する懐疑的な不信の思いは跡形もなく払拭されていた。小説はペリンスキーの心を鷲掴みにし、ネクラソフに勝るとも劣らぬ衝撃を与えたのであった——「連れてきてくれたまえ。一刻も早くその人を連れてきてくれたまえ！」。

ドストエフスキーは、1840年代思想の領袖の前に初めて立った瞬間のことを、この上なく貴重にして輝かしくも幸福な瞬間のことを、死ぬまで忘れることができなかった。ペリンスキーは彼を「とても恭しく落ち着いた様子で」出迎えてくれたと伝え、そうしてくれた理由を批評家が急いで吐露した言葉と感情の重みによって説明しようとしている。

批評家は彼に（「めらめらと燃え上がるような目で」）こう言った——「あなたご自分が何をなされたのかを理解しておいでですか！ …＜略＞… あなたは芸術家としての直感だけでこの作品を書くことができたのでしょうか、あなたご自身、あなたが我々に指し示した恐ろしい真実の意義をすべて理解しておいでなののでしょうか？ あなたがそのことを20歳そこそこでもう理解しているなんて、とてもあり得えないことです」（『作家の日記』、1877年、ドス25巻28-30頁〔1877年1月号、第2章第4節〕）。

ドストエフスキーはさらにこう続けている——「私は有頂天になった彼のもとを辞した。彼の住居のある建物の角で立ち止まり、空を、明るい昼中を、行き交う人々や何やかやを見回しながら、全身全霊で感じ取っていた。私の人生に祝賀すべき瞬間が、永遠の転機が訪れたことを、何かまったく新しい何かが、当時の私にはもっとも情熱的な夢想の中においてさえも予期できなかったような何かが始まったことを（当時の私は恐ろしいくら

いの夢想家であった)。…＜略＞…『果たして本当に私はそんなに卓越しているのだろうか』——私は恥ずかしながら心の中で、何かおどおどとした喜びとともにそう考えた。嗚呼、どうぞお笑いにならないでいただきたい。私はその後二度と再び、自分が卓越していると考えたことなどないが、当時はそう考えても平気であることができたのである！」（ドス 25 巻 31 頁〔同前〕）。

ベリンスキーは『貧しき人々』を社会的な小説の初めての試み、人道的で民主主義的な小説の最初の試みとみなし、作者に非常に大きな期待を寄せたのであった。批評家の言葉、歓喜、評価は、友人諸氏はもちろん、ベリンスキー・サークルの人々にも受け入れられ、街頭、軽食喫茶店、レストランなどで活発にどんどんと流布されることとなり、ほどなくして一般大衆、読者、そして文学に興味ある人々すべての共有財産となってゆく。かくしてドストエフスキーは、処女作の公刊を待たずして、世間にその名を知られることになったのであった。

上述のような人々の中ではベリンスキーが最大の人物であった。彼は教師であり導師であり指導者であり、その権威は巨大にして比類を絶していた。彼のサークルに入会した若い文学者たちは、ネクラースフも含めて全員が彼の弟子でもあり信奉者でもあった。だがドストエフスキーがこの時期のことを語り出すや否や、ベリンスキーの傍らには決まってネクラースフが寄り添っているのが分かる。1873 年 2 月 26 日、歴史家のポゴージンがドストエフスキーに、「あなたがベリンスキーにお会いになったのは何年のことですか」と尋ねると、「私がベリンスキーと知り合ったのは 1845 年 6 月のことで、その場でネクラースフとも知り合いました」という答えが返ってきたという¹³。ポゴージンはネクラースフについては一切質問していない。しかもドストエフスキーはその当時、ベリンスキーとネクラースフだけではなく、ベリンスキー・サークルの他の文学者たちとも顔見知りになっていた。それにもかかわらず、ドストエフスキーは、ベリンスキーと知り合った件について語る場合にはネクラースフについても言及するのを必須と考え、ベリンスキー・プレイヤッドの中でもネクラースフだけを特別扱いしようとしている。それが偶然のことなどであろう筈がない。

ベリンスキーとネクラースフの 2 人は、ドストエフスキーの文学上の洗礼親である。ベリンスキーがドストエフスキーの処女作の最初の批評家であり宣伝者だとすれば、ネク

13 Звенья. М.-Л., Academia, 1936, сб. 6, с. 445, 447. /『貧しき人々』の執筆が終わったのは 1845 年 5 月末のことで、ドストエフスキーがネクラースフのところへ手稿を持って行ったのは、おそらく 5 月最後の数日の間のことであり、手稿がベリンスキーのもとへ届けられたのは、1845 年 6 月 1 日前後のことだと思われる（Оксман Ю.Г. Летопись жизни и творчества Белинского. М., Гослитиздат, 1958, с.407.）。

ラーソフは最初の出版者であって、処女作をロシアの一般読者に紹介したばかりか、『貧しき人々』をロシアで初めて評価した、ということはつまりペリンスキー以前にペリンスキーとは拘りなく、大批評家に勝るとも劣らぬほど熱狂的に評価した人物だということになるだろう。このことは決定的な事実として強調しておかなければならない。何よりもドストエフスキー自身の証言自体、この点に関するペリンスキーとネクラースフ2人の意見を軽視しようとはしていないし、「新しいゴゴリが現れた！」という言明以上の賞賛など考えられないからである。ネクラースフの際限のない歓喜についてのドストエフスキーの回想の信憑性を裏付けてくれるのは、先に引用した『作家の日記』の抜粋がネクラースフの生前に発表されたものだという事実、たまたもしも不正確な情報があると思ったら、そこに自らの修正を——印刷物においてではなく、たとえ口頭においてだとしても、友人や近い人々との談話において——いくらか持ち込むことができた筈だという事実である。そうした修正がこれまで誰の手によっても確証されていないという状況は、ドストエフスキーの回想が信頼性の高い、正確を期したものだということを証し立ててくれているのである。おそらくドストエフスキーは、自分の回想を公表するに際して、ネクラースフがその回想を再確認できる筈だと信じていたに違いない。

『作家の日記』の回想記事は、ネクラースフによるその他の『貧しき人々』評によっても裏づけられる。1845年6月7日、ネクラースフは検閲官のニキテンコにこう書き送っている——「…ドストエフスキー氏の長編『貧しき人々』を…＜略＞…送付させていただきます（この長編はとても非凡な傑作で、そのことは手稿をお読みくださればお分かりになるでしょう）（ネク10巻43頁）。画家のソコロフは後年、その回想録の中で、ネクラースフが彼に『ペテルブルク文集』の装丁を依頼したとき、次のように言ったと伝えている——「しかし、この作品集の目玉であり、もっとも傑出した作品と言えば、ドストエフスキーの中編『貧しき人々』ということになるでしょう。この類い稀なる作品の宣伝のために頑張ってくださいよう、どうぞ宜しくお願いいたします」¹⁴。

さらにまた、ドストエフスキーに対する態度がもはや逆向きへと急変してしまった頃に書かれた風刺的中編『吾輩はいかに大物か！』において、チュードフ＝トロスニコフ（ネクラースフ自身を模した登場人物）は、批評家メルツァーロフ（ペリンスキーを模した登場人物）に、新人作家の処女作を紹介しながら、夢中になってこう語っている——

「『グリゴリー・アレクサンドロヴィチ！ 読んでみてください、後生ですから一刻も早くこの手稿を読んでみてください！ 私が間違っていないければ、運命の女神が我が国の文

14 Соколов П.П. Воспоминания. // Исторический вестник, 1917, № 9, с. 770.

学界へ卓越した新人作家を送り届けてくれようとしているのです。私見では、これは傑作中の傑作です！』（ネクⅥ巻 454 頁）。

「新しいゴーゴリ」, 「卓越した作家」, 「この小説はとても非凡な傑作」, 「傑作中の傑作」, 「類い稀なる作品」——これら以上の賛辞などとてもあり得まい。こうした賛辞の真価を見究めるためには、ネクラースフが非常に自制心の強い人間であり（ドストエフスキーはこのことをよく知っていた）、大仰に誇張された熱狂的な世辞など軽々しく口にしない人間だったことを考慮しなければならない。というわけで、文献中に披露されている意見の中で、あたかもベリンスキーがネクラースフよりもずっと熱狂的に『貧しき人々』を歓迎したかのような意見には、なかなか同意し難いものがあるのである¹⁵。

しかし、世辞だけが問題なのではない。「新しいゴーゴリ」という表現は、ドストエフスキーがネクラースフによって一定の方向性を持った作家として、すなわちゴーゴリの伝統、ゴーゴリの文学活動を相続し、継承発展させる作家として認知されていたことを意味する。この点を強調することはとくに重要である。当時ベリンスキーが先頭に立って情熱的に喧伝していた方向性、ベリンスキー・サークルのメンバーが加担していた方向性とは、ゴーゴリ的な方向性、要するにゴーゴリ派（自然派）だったからである。ネクラースフはこの点においてもまたベリンスキーに——『ペテルブルク文集』に関する有名な論文の中で『貧しき人々』の分析を他ならぬゴーゴリから始めているベリンスキーに、ベリンスキー自身の言葉を借りれば、ドストエフスキーの「創作上の父」であるゴーゴリとの比較から始めているベリンスキーに——先んじていたのである¹⁶。

この論文でのベリンスキーの口吻はより控え目であるが、家庭的な談話などの口頭ではもっと断定的な裁定や評価を聞くこともできた筈で、そうした断定的な裁定、評価については、ドストエフスキーの書簡から窺い知ることができる——「仲間たちはみんな、ベリンスキーでさえも、私がゴーゴリのさらにずっと先まで進んでしまったことを知っています」（ドリ 1 巻 86 頁 [1846 年 2 月 1 日付兄ミハイル宛]）。「仲間たちの言によれば、『死せる魂』以降のルーシにはこれに類した作品はなく、これは天才的作品だそうです（ここで言及されている作品とは『分身』のこと——ギン）」（ドリ 1 巻 87 頁 [1846 年 2 月 1 日付兄ミハイル宛]）。こうした引用は通常、べた褒めされてのぼせあがってしまった若きドストエフスキーの眩暈、功名心、自尊心を誇示するための材料とされている。眩暈に襲われたことはもちろん、その眩暈がかなり激しかったことも確かで、そのことについては後

15 Кирпотин В. Достоевский и Белинский. 2-е изд., доп. М., Художественная литература, 1976, с. 24.

16 Белинский В. Г. Полн. собр. соч. М., изд-во АН СССР, 1955, т. 9, с. 551.

にまた言及することにしよう。しかし、引用した証言はさらにまたもう一つのことを物語っている。ドストエフスキーはベリンスキーやその取り巻き連によって、ゴーゴリを超えて進化することを運命づけられた作家、ゴーゴリよりも一歩先んじることを運命づけられた作家として認知されていた、ということを語ってくれているのである。

ドストエフスキーは今しがた引用した手紙の後者で「引用されている一節は同じ1846年2月1日の手紙からのもので、これはギンの単純な間違いと思われる」、友人たちの評価について次のように説明している——「(ベリンスキーやその他の人々は)私の中に独創的な新しい傾向を見出しています。その傾向とは、私が自在に操れるのは分析力であって総合力ではないということ、つまり私は深奥へと分け入り、原子の一つ一つまで分析することによって全体を探り当てようとするということです。それに対してゴーゴリは即座に全体を把握してしまうので、私のような深みというものに欠けてしまうのです)(ドリ1巻87頁[同前])。ネクラースフの若きドストエフスキー観は、こうした考えの軌道上にある。ネクラースフはドストエフスキーが「仲間」と呼ぶ人々の一員であり、彼こそはドストエフスキーの中に「新たなゴーゴリ」を掘り起こした最初の人間に他ならないのである。

1840年代のネクラースフは、文学批評の舞台で積極的に活動したが、自らが出版した作品集に収められた長編『貧しき人々』の書評を活字にすることは、当然ながら、できなかった。いわんや彼を初めベリンスキー・サークルの他のメンバーたちの見解が彼らの共通の師によって表明されていたのだから、そうできないのはなおさらのことであった。だがそれでもやっぱりネクラースフは、『貧しき人々』を巡る雑誌間の論戦に首を突っ込んでいったのである。

ドストエフスキーの処女作は、たんに熱狂的な歓喜を引き起こしただけではなく、反動的な文学者や事なかれ主義の旧套墨守な文学者たちからの悪辣な攻撃をも惹起した¹⁷。そうした人々の一人、ネストール・クッコリニクは、「イラストレーション」誌に愚弄的な『ペテルブルク文集』評を掲載し、そこでベリンスキーとドストエフスキーを攻撃している。彼は『貧しき人々』を「ちっぽけな長篇」と呼び、嘲笑的な評価をくだしている。彼によれば、この「ちっぽけな長編」は、「いかなる形式も持たず、全体がうんざりするほど一様なディテールを土台としていて、私たちがこれまで味わえなかったような退屈さをもたらす…<略>… 作中のディテールは、スープの代わりに甘豌豆、牛肉やソース、焼肉や

17 まだ攻撃の書評が印刷物に現れていない時点で、ベリンスキーはこう書いている——「…世間の噂では、凡庸な人々や才能なき人々はもうドストエフスキー氏攻撃のための木製の剣と槍を磨いているらしい」(Белинский В.Г. Полн. собр. соч. М., изд-во АН СССР, 1955, т. 9, с. 493.)。

デザート代わりに甘豌豆が献立されたランチに似ている」¹⁸。

ネクラースフはクッコリニクの書評を、反論に値する書評とみなさなかった、というかどうかあっても真摯な書評とはみなさなかったと思われるが、それでもなおかつ、そのドストエフスキー攻撃の傍らを黙って通り過ぎようとはしなかった。反論のきっかけとなったのは、クッコリニク自身の作品である。ネクラースフは論文の一つでクッコリニクの作品を検討しているのだが、そこには次のようなアイロニカルな非難が盛り込まれていた——「それからさらに、大胆にも長篇もまた手掛けようとして、クッコリニク氏を少しも模倣しようとさえすることなく、自然さや独創性、芸術性といったことを自分流に解釈し、我が道を歩まんとしている人々がいる…＜略＞… いやはや何とも変わった連中である！『イラストレーション』誌が彼らの大胆不敵さに吃驚するのも無理がない… どうして驚かずにいられよう！… 彼らは貧しいので、公衆に振る舞うのはいつでもスープだけである——最初にスープ、途中でもスープ、締め括りにもスープ、というわけなのである… 彼らには一品料理が飽きられるということを理解するだけの思慮さえもないのである。ただ一人クッコリニク氏だけが長編の秘密を理解しており、最初はスープがよく、続いて出すのに一番いいのはソースで、それから焼肉などを供し…云々ということや、それにまた合間合間にシューシューとかパチパチといった音を出すような料理を何か差し挟むのも悪くない——そのようにすればどこへ出しても恥ずかしくない立派な長編が出来あがるということを知悉しているのである…」¹⁹。

ここでは、嘲笑的でアイロニカルな形式の中に、非常に重要なことが語られている。クッコリニクは、民主主義的で現実主義的な文学思潮の対蹠者であり、反動家であるばかりか、エピゴーネンであるとともに、夜郎自大的な修辞学派という呼称を奉られた文学思潮の典型的な代表者でもあった。ドストエフスキーの公民性と自然さ（つまりリアリズム）が、彼の処女作の独創性と芸術性が、クッコリニクー派のシューシュー、パチパチといった音を出すような作品と対峙するものとネクラースフが認識していたとすれば、その事實は、若きドストエフスキーがネクラースフによってどのように、またいかなる文学的および社会的なコンテクストにおいて認知されていたかを判断するための絶好の資料を提供してくれていることになる。

ドストエフスキー自身も以上のようなことのすべてを意識しており、彼の意識内では処

18 Иллюстрация, 1846, т. 2, № 4, 26 января, с. 59.

19 Некрасов Н.А. [Рецензия на альманах «Новоселье»]. Собр. соч. в 8-и томах. М., Художественная литература, 1967, т. 7, с. 125. この件については以下の論文も参照のこと → Блиничева М. «Бедные люди» или «Северная пчела»? // Неделя, 1971, № 50, 10 декабря, с. 9.

女作の大勝利も、その大勝利を勝ち取るための闘争も、常にネクラースフと緊密に結びついていた。ドストエフスキーはそのことについて、死に瀕した詩人の『終焉の歌』との関連においてもまた回想し、こう述べているのである——「…私にはその瞬間が隔々に至るまでありありと思ひ浮かぶ。その後その瞬間を一瞬たりとも忘れることができなかった。それは私の人生中でもっとも魅惑的な瞬間であった。徒刑地ではその瞬間を思い出しては元気を取り戻していた。今でもまだその瞬間を思い出す度に歓喜に打ち震えてしまう。それからもう 30 年が経過したのに、私はつい最近もまたその瞬間をすっかり思い出し、まるで再度その瞬間を経験しているかのような状態で、病気のネクラースフのベッドの傍らに座っていた。私は彼に、細かいことまではさておいて、かつて私たちにそんな瞬間があったということだけを思い出させようとし、彼自身もそうした瞬間を覚えていることを確認したのであった。そうでなくとも私には、彼が覚えていることが分かっていたのである」』（ドス 25 巻 31 頁 [『作家の日記』, 1877 年 1 月号, 2 章 4 節]）。

そうなのだ、彼らは 2 人ともに忘れ去ることなどできなかったのだ。彼らは急速に、おそらくは最初の出会いの瞬間から近い間柄になったと思われるが、まもなく作家は一夏の予定でレーヴェリ〔エストニアの首都タリンの旧名〕にいる兄のもとへ避暑に出かけ、秋頃になってやっと帰ってきたのであった。この時期、とりわけ 1845 年最後の数カ月、彼らはしょっちゅう会っては交流を深めていった。ネクラースフはまるでドストエフスキーの親友であるかのように振舞うことさえあった。彼はオドエフスキー公爵に、ドストエフスキーが某月某日以前には公爵を訪問できない旨を知らせている（1845 年 11 月 27 日付書簡／ネク X 巻 48 頁）。やがて創作上の共同事業についての計画や企画が持ち上がる。彼らが思い立ったのは、滑稽で風刺的な作品集『ズッボスカル〔「歯を剥き出して嘲笑する者」の意〕』の共同発行ということだった。それは（一種の雑誌のようなものとして）定期刊行される予定であった。ドストエフスキーは『ズッボスカル』の綱領的な広告文の執筆を任されるが、その広告文こそ彼が印刷物に載せる初めての作品となったのであった〔『貧しき人々』を所収の『ベテルブルク文集』は検閲をなかなか通過できず、1846 年 1 月下旬に発刊されたのに対し、『ズッボスカル』の広告文の方は 1845 年 10 月末に印刷発行されている〕。

この企画の運命はそれほど月並なものではなく、全貌がすっかり明らかにされているとは考え難い。ドストエフスキーは兄のミハイル宛の書簡で、この企画について知らせながら、次のように書いている（1845 年 10 月 8 日付）——ネクラースフは「軽くて小さな作品集の企画を提示しました。その作品集は文学仲間全員の力を合わせて作られるのですが、主だった編集者となるのは僕とグリゴローヴィチ、それにネクラースフの 3 人でしょう。（作品集は印刷用紙 2 枚の分量で、2 週間に 1 回、つまり毎月 7 日と 21 日に発行される予定

です)。作品集の名称は『ズゥボスカル』で、その狙いはあらゆるものを槍玉に挙げ、笑いのめすことです。誰一人容赦せず、演劇、雑誌、社会、文学、街頭の出来事、展覧会、新聞記事、外国の報道等々、要するにあらゆる事物をターゲットにしていちゃもんをつけるわけです。しかもそうしたことはどれもこれも常に変わらぬ同じ精神、同じ方針に基づいて行なわれるのです」(ドリ1巻82頁[1845年10月8日付])。さらにその先では、第1号が11月7日に出版されるので、それを兄ミハイルへ次回の手紙と一緒に送付することが伝えられている。同じ兄宛の11月16日付書簡にはこう書かれている——「ところでネクラースフは『ズゥボスカル』を企画しましたが、これが魅力的でユーモアに溢れた作品です。広告文は僕が書きました。この広告文は世間を賑わしました」(ドリ1巻84頁)。

『ズゥボスカル』はユーモア短篇、フェリエトン、パロディ、アネクドート、小品が満載される予定となっており、寄稿者たちはこの作品集をフェリエトン・タイプのもので、一種のフェリエトン集のようなものだと考えていた。首都の生活あるいは都市の生活一般を(ときにはヨーロッパの都市生活をも射程に入れて)、愚鈍で視野の狭い住民の目を通して——大抵は田舎の官吏とか地主の目を通して——描くというフェリエトンの伝統は、かなり以前から存在していた。1821年に既に発表されていたルイレーエフのフェリエトン『ペテルブルクの田舎者』、ミャートレフの長大な韻文フェリエトン『異国におけるクウルヂュコワ女史のセンセーションと意見の数々——エトランゼ報告』(1840～1844)、1840年代前半に書かれたネクラースフの一連のフェリエトン(韻文仕立てのものは『ペテルブルクの田舎者小役人』と『金棒引き』、散文仕立てのものは『ブルッジーニンの手記』)などは、この伝統に密接な関係を持っていた²⁰。

ドストエフスキーはこの伝統を踏まえながら、任された作品集の広告文において何はさておきズゥボスカルの人物像を、すなわち作品集の中で観察し論評する主体となる筈の人物像を、呑気なフラニョール[「そぞろ歩きの好きな人」の意、仏語の *flaneur* に由来]、善良この上なく素朴丸出しの小物、「ペテルブルクの地で」(ドス18巻7頁)生まれた遊び人として造形しようとしている。もっとも最後の特徴はまったくどうでもいいように思われる。その記述のほんのちょっと前では、「彼の生まれは…<略>…モスクワであって、彼は、他のことはどうあれ、必ずやモスクワっ子でなければならない」(ドス18巻6～7頁)と

20 このことについては以下を参照のこと → Гин М.М. О своеобразии реализма Некрасова. Петрозаводск, Карельское книжное издательство, 1966, с.87-94. またこうしたフェリエトンの伝統をしっかりと念頭におきながら書かれたものに、サルトイコフ＝シCHEDリンの『ペテルブルクの田舎者の日記』(1872)、グレーブ・ウスペンスキーの『田舎者の外国滞在日記』(1874)があるが、それらはまるで異なったタイプの作品であって、軽妙なフェリエトン・ジャンルの手法と伝統が、ただたんに模倣の対象とされているに過ぎない。

なっているからである。

広告文にはこう書かれている——「ご想像いただきたい、まだ若いとはいえ、そろそろ中年に近づきつつある男のことを。彼は陽気で、機敏で、喜びに溢れ、騒がしく、遊び好きで、けたたましく、呑気で、口が達者で、丸々と太っていて、いつも満腹であるため、彼を見ると自然と食欲が湧き、顔が綻んでしまうのである。とにかく真面目一徹の人、職場では冷静そのもので、たとえば午前をずっと役所で過ごし、腹をすかしている人、胆汁質な人、怒っている人、声がかすれている人、声がしゃがれている人、それに自宅のランチへと急いでいる人、そんな人でさえも、我らが主人公を目にした途端、心は晴れ晴れとして、この世はこんなに楽しく生きられるところなのだ、この世に楽しみがないわけではないのだと思うようになってしまうのである」(ドス 18 巻 6 頁)。

火を見るより明らかなのは、こうした主体主観から生まれ得るのは、陽気で気晴らし的なユーモア、罪のないお喋り、誰にも迷惑のかからない罪なき笑いだけ、一言で言ってしまうと、ズッボスカリストヴォ〔ズッボスカル的な嘲笑愚弄〕だけだということである。ドストエフスキーは広告文において、構想中の作品集のそうした罪のない娯楽的な方針を一目瞭然の形で伝えるために、かなりの力を割いて奮闘している。作品集の題名からして、そうすることはもっとも重要なことでもあり、そしてもちろん、検閲機関との関連において出版者全員に共通する「ストラテジー」の合意点でもあったことだろう。しかし、それでもなおかつ、『ズッボスカル』は検閲を通過しなかった。それは何故であろうか？

何よりも最初に、新しい出版物の広告文を発表するには、検閲局の認可を——当該の出版に対する許可を——前もって取り付けておく必要があった、という点を確認しておこう。そうした許可なくしては、いかなる検閲官といえども、広告文の印刷を認めるわけにはいかなかった。出版許可が事前に確保されていたことは、引用したばかりのドストエフスキーの書簡に記載されている正確な情報——出版物の容量、刊行の定期性、出版物が世間に出回る期日についてはもちろんのこと、第 1 号の刊行期日についてさえも正確な情報——によって、間接的に裏付けられている。

こうした裁可、許可は、問題の原則的解決に際して、当該出版物の発行を保証するものではまったくなかった。広報された出版物であっても、たとえば検閲関連機関でその中身が紹介された後、出版を禁止される場合もあり得たのである。では『ズッボスカル』の場合、いったい何が起きたというのであろうか？

グリゴローヴィチの次のような証言はよく知られているものである——「広告文中の不用意な 1 フレーズ、すなわち『ズッボスカル』は笑うに値するものは何でも笑いのめす

だろう」という1フレーズが、出版差し止めの原因となったのである」²¹。だが、広告文中にそうしたフレーズは見当たらず、もっとずっと柔らかくて慎重な言い回しが使われている——「…ここでの笑いは、しかし、皆さんには敢えてお断りしておきたいが、万人と万物に対するまったく罪のない、素朴で呑気な、子供じみた笑いである」（ドス18巻7頁）。それでもなおかつ、広告文の注意深い読者は、作品集の出版者たちの興味関心の範囲が非常に広いこと、日常生活の裏側に対する注目がいかにも執拗であることに感付かないではいられなかった——「たとえばペテルブルクには、眩いばかりの豪華絢爛さ、大小様々な騒音、無限に多様な人々、彼らの無限に多様な活動、数々の秘められた欲望、紳士連に淑女連が存在する一方で、汚泥汚物の大きな塊、デルジャーヴィンの言い草を借りれば、金メッキされていたりいなかったりする汚泥汚物の大きな塊もあれば、ベテン師に本屋、高利貸に催眠術師、泥棒に農民等々、そうした一切合財もまた存在するのである…」（ドス18巻7頁）。こうした一節は、当然のことながら、文学上の秩序の監視者たちに不信の念を抱かせたに違いない。だが、問題はその一点だけに存するわけではない。

ところで、『ズッボスカル』の中心人物については次のように言われている——「彼はある種の長篇や雑誌、作品集、フェリエトン、新聞などにおいて、公衆の面前で猛烈に言いがかりをつけられたり、引きずり回されたり、悪用濫用されたりしたものだから、今度こそもっと控え目な態度に終始し、もう少し威厳をもって振舞おうと固く決心したのであった…」（ドス18巻7～8頁）。アカデミーのドストエフスキー30巻全集では、この一節には注が付されており、そこでは次のような仮説が立てられている——「ドストエフスキーがここで真っ先に念頭においているのは、おそらく、1840年代の＜自然派＞に反対の立場を取るブールガーリンやセンコフスキーの長篇、作品集、フェリエトン、それにブールガーリンの主宰する『北方の蜜蜂』、センコフスキーの主宰する『読書文庫』のことであろう」（ドス18巻215頁／注釈者はキーコ）。しかし広告文のテキスト、ドストエフスキーの書簡、その他いくつかの状況から推し量るならば、企画中の作品集において婉曲的に表現されなければならなかったことについて、もっと説得的で正確な判断をくだすことができそうに思われる。

ドストエフスキーは広告文のもっと先の方で、『ズッボスカル』の「一義的にしてもっとも重要な課題」——それは真実である、と宣言している。この宣言は、まったく自然なもののように思えるし、宣言の形式が故意に誇張された、一目でパロディと悟られるようなものでなかったなら、この宣言はおそらくいかなる当惑も招来することなどなかったで

21 Григорович Д. В. Литературные воспоминания, с. 82.

あろう——「真実こそが第一である。『ズッボスカル』は真実の反響、真実の喇叭となり、昼夜分かたず真実を擁護し、真実の砦、真実の守護者となるであろう。とくに現在の彼は、少し前から真実がすっかりお気に入りとなってしまった現在の彼は、そうした存在となるであろう。しかし彼は時々嘘をつくこともあるだろう。どうして嘘をつかずにいられようか？ 彼が時折嘘をつくとしても、ごく控え目な嘘だけである。それは誰しにも起こることなのである。誰しものが時に嘘をつきたがるものなのである。つまり、嘘をつかないなどと私たちは——いやはや！——うっかり口を滑らしてしまったわけだが、その方がより美文調になるからなのである…＜略＞… ともかくにも彼は真実を擁護し、血の最後の一滴まで真実を固守するであろう！」。そしてこのパッセージはこう結ばれている——「というわけで、私たちはここでもう一度、真実こそが第一であるということを繰り返し言うておこう。『ズッボスカル』は真実を糧とし、真実に固執し、真実擁護のために活動するだろう。そして、そんなことは起こらないように願いはするが、もしも彼が死ぬような事態にでもなれば、彼が死ぬのは真実擁護のため以外ではあり得ないであろう。そうなのだ！ 彼が死ぬのは真実擁護のため以外ではあり得ないのである！」（ドス 18 巻 8～9 頁）。

「真実の喇叭」、「昼夜分かたず真実を擁護する」、「血の最後の一滴まで」、「真実のために死す」、と同時にまた嘘も辞さないという姿勢——これらはあからさまにパロディを念頭において誇張された悪ふざけである。こうした悪ふざけはいったいどこからやってきたのか？

実は、当時のもっとも偽善的で無定見で販売第一主義的文学者であり、ずっと第三課〔皇帝直属秘密警察〕の手先でもあったファッディ・ブルガーリンが、紙面上で自らを熱烈で不屈な真実愛好者として、真実のために戦う闘士として、真実の殉教者として提示することを好んでいたのである。ネクラースフはすでに 1843 年、「北方の蜜蜂」を嘲笑しているが、そうした嘲笑の引き金となったのは、「彼〔ブルガーリン〕がその擁護のために艱難辛苦し、彼が何よりも愛する『母なる真実』を、敵味方の隔てなく相手に面と向かって直言する」という、いわば「青年らしい不幸な習慣」のようなものをいつでも公衆の脳裏に焼き付けようと躍起になっているブルガーリンの姿勢であった（ネク IX 巻 89 頁）。

ベリンスキーはブルガーリンを「真実を愛するフェリエトン作家」と呼び、「北方の蜜蜂」を「真実を愛する新聞」と呼んだ。ブルガーリンの『回想録』を祖上に乗せたベリンスキーの有名な論文において、ブルガーリンについての風刺的な人物評の土台となっているのは、「ブルガーリン氏の真実に対する燃え盛るような愛」である²²。またブ

²² Белинский В.Г. Полн. соб. соч., т.9, с. 615-638.

ルガーリンの新聞を論じたベリンスキーの論文の一つは、『『北方の蜜蜂』——真実とロシア語の純粹性の庇護者』と題されているが、そこには先に引用したばかりのドストエフスキーの広告文との呼応関係を探り出すことさえできそうである（このベリンスキーの論文は、ドストエフスキーの広告文の1ヶ月後に発表されている）。ベリンスキーは、プウルガーリンの新聞の「もっとも重要な」モットーの一つとしての「真実への愛」に言及しながら、こう書いている——「もしもこの新聞（『北方の蜜蜂』——ギン）を信じるとするならば…＜略＞… 唯一『蜜蜂』だけがこの世の何にもまして真実を愛しており、いつでも真実のために死ぬ覚悟があり、真実のためにあらゆる文学仲間からの迫害を耐え忍んでいるということになる…」²³。

『ズッボスカル』の誇張化された真実への愛とは、プウルガーリンと『北方の蜜蜂』に対する露骨にして悪意に満ちたパロディに他ならない——そのことを理解するのは容易いことである。しかもドストエフスキーはそこで留まろうとしなかった。広告文のテキスト中にあちこちばら撒かれた個別的なあてこすりもまたすべて同じ標的に照準されているのである。引用したそうしたあてこすりの一つは、「一切合財」という言葉で終わっている。「雑誌一切合財」は、『北方の蜜蜂』に毎週掲載されるフェリエトン欄の名称であり、長年にわたって毎週土曜日にはこの名称のもとにプウルガーリンのフェリエトンが掲載されていたのである²⁴。また引用した当てこすりよりも前の方には、『ズッボスカル』は「あなた方が幕の表側だけを見ているときに、幕の裏側を見る」と書かれているが、ここでもまたプウルガーリンのことが念頭に置かれているのである。というものの、プウルガーリンの著書の一つは、『ロシアの風習概説、あるいは人類の表と裏』（サンクト・ペテルブルク、1843年）と題されていたからである。

この文脈で考えるならば、広告文中の「尊敬おく能わざる読者諸兄」（ドス 18 卷 6 頁）という表現は、実に適切なものとして受け取られるべきであろう。プウルガーリンはこの馬鹿丁寧な呼び掛けの言葉をうるさいくらい頻繁に多用し、彼自身「尊敬おく能わざる御仁」と綽名されていたのであり、またネクラースフの自伝的長篇『チーホン・トロースニコフの生涯と行状』のプウルガーリンを扱った章の題名は、この表現にあやかって名付けられたものに他ならないからである²⁵。この長篇はネクラースフ生前には公刊されなかったもので、ドストエフスキーにはおそらく知る術がなかった筈なのだが、それでもドストエ

23 Там же, с.371. Ср. с.67, 495-496 и др.

24 プウルガーリンの著書にはまた、『蚊の群れ。一切合財』（サンクト・ペテルブルク、1842）と題された一冊もある。

25 先に引用したばかりのネクラースフの[クッコリニクに関連した]書評も参照のこと（ネクⅨ卷 90 頁）。

フスキーは広告文に限らず、それに類した他の場合でも、何か特別な資料や情報などがなくて困っている様子をまったく見せない。ということはつまり、ネクラースフの長篇のことは、文学者という文学者にはもちろん、読者という読者にさえもよく知られていたということに他ならない。

以上のことから判断すれば、ドストエフスキーの広告文と計画中の作品集全体が、アンチ・プウルガーリ的な方向性で統一されていたことは疑い得ない。こうした方向性についてドストエフスキーは、引用した兄ミハイル宛の1845年10月8日付書簡中で触れている——「エピグラムは『北方の蜜蜂』のフェリエトンにおいてプウルガーリンが使った有名な言葉——『我々は真実のために死ぬ覚悟があり、真実なしでは生きてゆけないのである』等々——から取られるでしょうし、ファッデイ・プウルガーリンが署名することになるでしょう。11月1日に発表される広告文でも同じ言葉が書かれることになるでしょう」（ドリ1巻82頁）。すでにご承知のように、こうした文章は広告文中に、そのままの引用という形ではないにしても、ほとんど引用と変わらない形で使用されているのである。

こうしたことはすべて、次の事実を意味している。第1に、『ズッボスカル』の出版者および執筆者たちは自らの作品集を、一見するとそう見えるように、無邪気で悪意もなく、ただ気楽にのほほんと構想していたのではなかったということ。彼らはおそらく、一般読者に娯楽と気晴らしを提供するという意図をまるで無視していたわけではないが、そうした側面の執拗な強調は、正真正銘の綱領の反映というよりもむしろ目眩し的な陽動作戦だったのである。もしもこの陽動作戦が成功しなかったとすれば、それは出版者たちの過失ではなく、彼らの不幸であったと言うしかない。第2に、プウルガーリンは一種特定のタイプの文学の——すなわち反民主主義的、無定見的、奴隷根性的等々の文学の——象徴的かつ具象的な存在であるということ… だが実は、プウルガーリン一人に限られた問題ではないのである。

引用したドストエフスキーの書簡は、計画中の作品集の方向性と性格についてもっと精密な知見を得るための足掛かりを提供してくれている。ドストエフスキーは、作品集の第1号に掲載予定の作品を列挙する一方で、その他にいくつかの風刺的な嘲笑の対象を取り上げている。真っ先に取り上げられているのは、当時のもっとも右翼的なイデオログの一人であり、「公式的な国民性」（「正教、専制、国民」）の擁護者でもあった「シェヴィリョーフの講義」である。続けて「それからスラヴ主義者たちの最近の集会。そこではアダムがスラヴ主義者で、ロシアで暮らしていたことが厳かに証明されるとのことである…」と述べられている。またさらにもう一つ風刺の対象として、クウコリニクの「イラストレーション」誌のことも触れられている。計画中の作品集が民主主義的な傾向と風刺性を有してい

ることは、ドストエフスキーがその関連でフランスのアルフォンス・カールの民主主義的な傾向の月刊誌「雀蜂（Les Guêpes）」に言及しているという事実によっても明らかである（ドリ1巻83頁[1845年10月8日付兄ミハイル宛]）。

上述したすべてのことは、作品集の出版者と執筆者の全員が同じ精神、同じ方向性を共有していたというドストエフスキーの書簡中の言葉に特別な意味を付与している。すなわち、彼らの誰もが、反動的で反民主主義的で無定見な文学の打倒闘争という点において一致団結していたのであった。そして、彼らの綱領のアンチ・プウルガーリン的要素が広告文中にすでに旗幟鮮明に表明されているという事実は、その後かなり長い期間にわたって尾を引くこととなり、その跳ね返りとして現実上の実害をもたらしてしまうという可能性に繋がってしまったのであった。

支配層や権力側はプウルガーリンを奨励し、支持する一方、プウルガーリン自身は第三課に対する自らの「奉仕」を利用することができたし、また実際に臆面もなく利用することによって、気に入らない出版、作品、芝居への弾圧はもちろんのこと、ときには出版、作品、芝居の禁止や差し押さえも勝ち得ていたのである。そうしたことは実際、一再ならずあった。それゆえ、どれほど慎重に慎重を期さなければならないとしても、プウルガーリンその人が企画されて既に広告までされている出版の運命において不吉な役割を演じたと仮定してみるのには、非常に理に適ったことなのである。つまり、プウルガーリンは、当然ながら、作品集のアンチ・プウルガーリン的方向性に気づかないでいられた筈がなく、そのことに気づいてしまえば、無関心のままでいられた筈もない、ということなのである。先に引いたグリゴローヴィチの『ズゥボスカル』発禁の原因に関する証言は、だから、少なくともその裏づけと補足を必要としているのである。〔以下次回へ続く〕